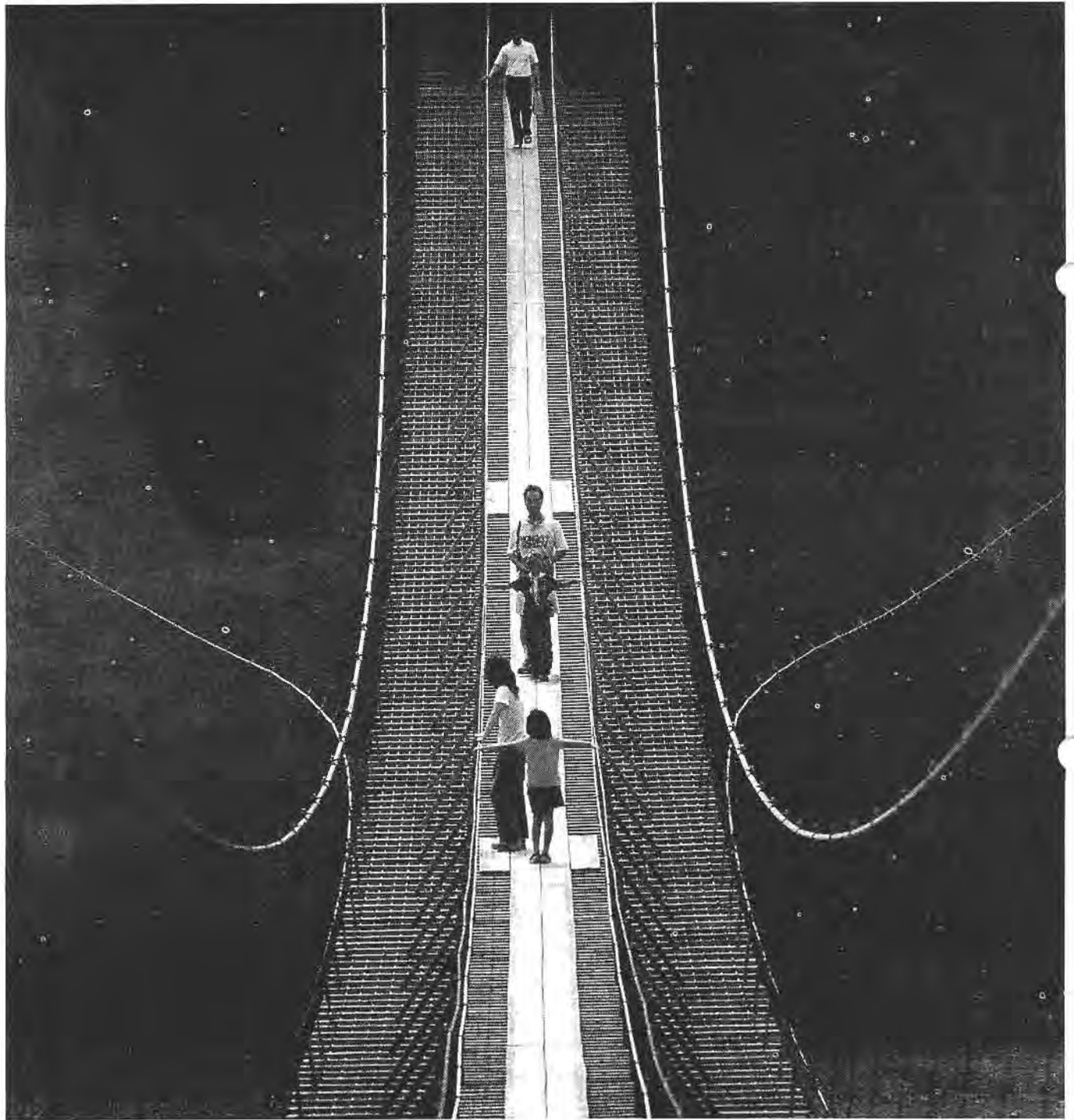


中川根ふる里通信

= 第67号 =

中川根ふる里通信
 昭和61年4月20日創刊
 編集・発行・連絡先
 〒428-0313
 静岡県榛原郡中川根町長尾
 TEL. 0547-36-0015 859-6
 郵便振替口座 00870-4-81556



大井川で一番長い吊り橋「くのわきはし」

昭和6年大井川鉄道開通と同期につくられました、町のカレンダーより。

中川根町の進む道が開けました。

国の推める平成の大合併については、財源のとぼしい町です。方針として当初から「合併希望」との考えがあったように聞いていますが、当初から積極的な取り組みが行われず、しかも上野前町長から杉山町長にバトンタッチした事もあり、実質的には二年余の準備期間となり、時には住民説明会も行われてきました。

66号10ページにも載せましたが、最終段階に入って、行政と議会の意見が対立し、町民が参加しての論議にまで拡大されました。九月の町議会で町の示した案の議決がなされ、十月二日、「本川根町と二町で合併する」という町の方針が通過しました。

これに合わせ、本川根町議会でも十月十四日、二町で合併する案が通過しました。二町は国の定める期限内の平成十七年三月にあわせて合併する、法定協議会を設立する模様です。

いよいよ合併に向けて動きはじめました。一町民から見て感じたことは、「二町合併は、人口数においては、国も県も決して妥当なものではない」と考えるに違いないと思えます。二町の所有している地域は、拡大な山林と河川源流、いわば、生物の生きていく生命線を守っている地域であり、この地域を守り育てる施策も「ちんちん」と行っているのだから、都市部の命とあずかっている地域だから、見ていてほしい。と言ふ点と、川根地域に自治体が残ることは、高齢社会でもあり、急な行政対応の変化にも対応出来ない住民が大いなる事柄もあって、現在と同じ様な行政サービスが受けられやうな感がして、有難い事ではないかと思ひました。しかし、将来の方向性として、大規模行政区に移行するべからず、事柄も考へ

行政も住民も一層努力かし（行政はお金のかからない施策、住民は地域貢献所得向上）力をつけていかなければならないと思ひました。

今夏は、雨、雨、雨、雨の夏でした。

全国的に東日本は冷夏、西日本は平年並みの暑さと聞きました。八月中は気温が上がらず、久しぶりに涼しい夏となり、九月に入って、残暑ギリギリの日々がやってまいりました。十月も中旬から秋の深まりを感じています。

涼しい夏とは、雨や曇りの日が多かったこと、特に台風10号接近にともなう大雨は、八月六日頃から三日間も続き、大井川は大洪水となり、特にテレビの全国放送で、中川根町が「最も土砂災害の起りやすい地域」の放映があり、皆さんからご心配の電話をいただきました。ありがたうございました。久しぶりの満水状態の大井川を見て、改めて、自然の力の大きさを知り、この様な水量ですと、昭和四十年から五十年代には、高郷、上長尾地区では浸水被害があり、大井川の流れをいっきに通す施策（護岸と流れを遠ざける）と、堆積土砂の取りのぞき作業が行われていた為、ここ二十余年は浸水被害は起っていません。が、上流部、水川、徳山、本川根町は洪水の度に危険な状況になっています。

又、榛原川源流部ホーキナギ付近の大崩落は、榛原川中下流部に堆積しており、浸水時にいっきに大井川へ流入して、大変な状態でした。雨が降りになったので、見に行ってみると、満水の大井川の川の色と、榛原川の川の色は違って、榛原川の色は赤銅色で、材木もまじり合流点では逆巻き返って、ものすごい迫力でした。

お茶あれこれ—第四回—

文学に現れたお茶—その二—

静岡市 石塚 幸男

前回では日常生活における「お茶」の役目を見てきた。その点、川柳などに最も効果的に使われるだろう、と思つていろいろ調べてみた。

飲んべえが車をつらいお茶をのむ
お茶を手に蒼の悲喜を聞き流す
春来れば老いが溜う茶の色香
裏腹な話に冷えた茶をすすする
老夫婦旅の疲れを茶でほぐし
良い縁談纏まりかけて茶が旨い
茶柱を黙つて飲み干す通夜の席
仏にも冷茶を供えて独り言
さわやかに信する友と飲む新茶
茶柱が立ってる朝餉 秋近し

「茶柱を黙つて飲み干す通夜の席」の句には思わずニヤツとする。「おい、茶柱が立ったよ」という言葉も誰にも言えず、「お茶」とともにぐっと飲みこんでしまうのである。

もう一句、「仏にも冷茶を供えて独り言」は、ご主人に先立たれた老寡婦が、仏壇の前で「今日は暑いねえ、おじいさん……ま、そちらも暑いでしょ！冷たいお茶でも飲みなされ」とブツブツ独り言を言っている様子が、高齢社会の世相をも感じさせて、私など身につまされながら、思わず微笑してしまふ。

今日この頃は、このような光景はやや薄れてきたような感じだが、それでも、ウンウンなるほど、とうなずける各句である。お茶の庶民性・日常性とても言えるだろうか。

緑を飲む

出身地が静岡というせいもあってか、今年は、八十八夜摘みのお茶を幾か所からいただいた。もともとお茶という目にはいい男だが、その男の結婚相手の女も、東北出身なのにならぬはるかに上まわるお茶好きであり、少くく余計にストックがあったって、まったく気にならない。いや、それどころか、うかうかしているときみん飲まれてしまうので、わたしは自分が愛飲する分は仕事場の方へ確保しておいてある。それを、一入で入れて飲む日々が続いている。

新茶はとくにそうだが、わたしには、あのお茶の独特の香りを味わうだけで、命があらわれるような思いがする。果実のフレッシュ・ジュースなどより、もっと新鮮なもののように思われる。わたしはコーヒーも好きで、自分で入れて飲むし、紅茶も決してきらいではないが、日本のお茶のような鮮烈な感覚のみものはないように思う。

そう思うのは、おそらく日本人としてのわたしの偏見にちがいない。どの民族だって、そういう、交換不能の飲料や食物を持っているわけだし、コーヒーだって、紅葉だってそういうものにちがいない。しかし、あの黄緑色の「新茶を飲む」という感触は、この国らしいこととしたかである。刺身がこの国の海をあらわし、山菜がこの国の山をあらわすとすれば、茶は森をあらわすかもしれない。そんなことを思いながら、近くの丘をながめたりしている。(句降りたことのない駄句)

東北出身のお茶好きの奥さんとお茶の取り合いっこで、微笑ましい駆け引きをする。静岡出身の筆者。後半は、日本的な飲み物としてのお茶の特質を達意の文章で的確に表している。

東北と言えは、お茶と余り縁がないように思う人もいるかもしれないが、とんでもない。私の故郷の横手(秋田県)では、

お茶飲み話の時間が生活に不可欠である。雪に閉ざされた冬ではとくに……。炬燵の上に山盛りのナタワリガッコ(荒く切った大根の糍漬け)やイフリガッコ(沢庵の燻製)をポリポリかじりながら、お茶を飲む。話がはずむ。雪国の風物詩である。とにかく、雪国の人たちはお茶が好きなのだ。ちなみに、お茶栽培の北限は秋田県能代市付近である。

閑話休題。本題に帰ろう。今まで、どちらかと言えは、潤滑油としての「お茶」を取り上げてきたが、文学では、もっとシリアスな道具として用いられている場合もある。

井上靖の『氷壁』から、当たってみよう(紙幅の関係で詰めて採録)。

「とにかく、気分が悪いので寝ていると言ってくれ。それよりこんど来る時、茶をたのむ」「はい」美那子はすぐ部屋を出て行ったが、暫くすると茶を持って上って来た。そして、「こんどは会社の三木さんからの電話ですの。どういたしましう」「気分が悪い」「でも三木さんですよ」「相手が誰でも、気分が悪いものは悪い」美那子は直ぐ出て行った。その美那子の背へ、「もっと濃いのをもらおうか」と、教之助は言った。美那子はまた茶を持って来た。……中略……教之助は、時々、書斎を出て、階段の上で手を鳴らした。「はい」という美那子の声が聞え、やがて美那子は階段の下に姿を現わし、イヤリングをつけた顔を仰向けた。

「お茶をくれ」「はい」美那子はすぐ台所へ引返して行く。そんなことを午前中に何回か繰り返した。何回目かの時、階段の下の妻は、階段の上の夫に言った。

「お茶の時は、ベルを鳴らして戴けません？ その方が簡単ですわ」「ベルを鳴らすのか」「ベルが鳴ったら、お茶だと思って、お茶を持って参りますわ」なるほど、多い時は一時間に三、四回

の割でお茶を請求するのであるから、ベルを鳴らすことを以て、お茶の請求の合図にするという取り決めは一種の名案であるかも知れなかった。……中略……そうして、こっちの隣の気持ちも全然認められていないような不満を、教之助は美那子の言葉の中に感じた。専ら彼女自身がここまで出て来ると言う手間は省くための措置であるかのような気がした。「ベルがお茶だと思おうと言ったね」「ええ」「お茶以外の用事だってあるだろう」「それはそうでしょうけど」美那子の表情が少し悲しげに曇るのが、階段の上からでも判った。「でも、ほかの用事って、そんなにはありませんわ。大抵お茶ですもの」「よし、じゃ、ベルを鳴らそう。濃いのをほしい時は、長くても押すか」

本題に入る前に、この作品(朝日新聞連載)の「ナイロンザイル事件」に触れつつ、あらすじを述べてみる。

徳高への登山中、親友同士の魚津と小坂を結びザイルが切れ、小坂は転落死する。二人を結びザイルはどうして切れたのか。自分の命を守るために、ザイルを切ったのではないかという疑いが、魚津にかかる。事実、山での実験でもザイルは切れない。魚津はますます窮地に立たされる。

この場面は、ナイロンザイル会社の社長教之助とその若く美しい妻美那子との間で、小坂をはさんで、秋風が立ちほ

めているところである。

これだけのシーンに「茶」(「濃い」も含めて)という字が十四か所も出てくる。子細に見ると、教之助・美那子夫婦の間を、かろうじて結びつけているものは「茶」だけのような感じである。さらにまた、その使われ方を検討してみると、二人のいらだちを象徴している感じすらする。私はかつて、このような「お茶」の登場を「心理的葛藤の象徴」として捉えたことがある(『生活』を奏でる茶)。

「心理的葛藤の象徴」としての「茶」はまた、次のような場面でも現れる。『存じ川端康成の『千羽鶴』のワンシーンである。

夫人は釜の蓋を取らうとして、手がふるへ、蓋が釜にあたって、いきざみに鳴った。杓を持ちながら、胸が傾いて、釜の肩を夫人の涙が濡らした。

「このお釜も、お父さまに買っていたきましたのよ。」と、うですか。知りませんでした。」と、菊治は言った。亡父が所持してゐた釜と夫人に言はれても、菊治は反撥を感じなかった。素直にそれを言ふ夫人を、奇怪とも感じなかった。夫人は茶を立て終ると、

「お持ち出来ませんわ。いらして。」菊治は釜のそばに行つて、そこで茶を飲んだ。気を失ふやうに、夫人が菊治の膝に倒れて来た。菊治は肩を抱くと、夫人はちよつと背筋がゆるめいて、息が細まってゆくやうだった。そして、菊治の腕は幼い子を抱いたやうに、夫人はやはらかかった。

大田未七人は菊治に抱かれるために、だけ、菊治の茶室を訪れる。そして、思いを遂げた夜、自ら命を絶つ。神聖であるべき茶室は、こう繊細に描写されると、男女の情愛の舞台になつてゐるにせよ、決して生臭くない、むしろ縹渺たる

界隈気を漂わせる。「心理的葛藤の茶」というより、夫人にとつてみれば「決死の茶」と言へるかもしれない。今まで、文学の中で、いろいろな形で登場する「茶」を見てきた。こゝらで、ちよつと息抜きをしてみようか。

柴田錬三郎の『眠狂四郎無頼控』の中に次のような叙述がある。一体どれくらい、茶が出てくるか、教えてみるのも一興というものだ。

「おや、金八つあん、どこからとんでおいでたえ？」
「駿河の国は、茶畑から、ちやつきりちやつきり、巾着切が、茶汲女に会いたさ見たさ、茶々無茶苦茶に、駕籠をとばして、ただいま、いちゃつき、とくらあ。どうだ、こつ、ちんと着かえた旅姿は、へへ、これを、えきりす語で、チャーミングと言わぬ。翻訳したら、ちやきちやきの江戸子、ってんだ。」
「一名、こちや、ちやらっほこ、とも申します」

柴田錬三郎も、粋な息抜きをしたものだ、と駄洒落でも言わなくちや、なんて……

息抜きついでに、こつこつのはどうだろう。

出かけてくるよとお茶をのみ
帰ってきたよでお茶をのみ
だれも来ないとお茶をのみ
だれか来たよでお茶をのみ
ご飯の前だとお茶をのみ
ご飯がすんだとお茶をのみ
そろそろやるかとお茶をのみ
いちだんらくでお茶をのみ



茶の花(10月3)

「ふんふん、なるほど、」と、うなずいて、にやりとしている人が、そこいらに沢山いそ、うな気がするが、はてさて……お茶の未来は明るい!

大井川の清流を考える 第四回

大井川を見つめて八十年

山田 部

前号まで、母なる川、大井川の源流から中流域を経て沿岸域(駿河湾)に至る大井川の、今と昔に合せて山・川・海のつながり、自然の循環について、記述してまいりました。

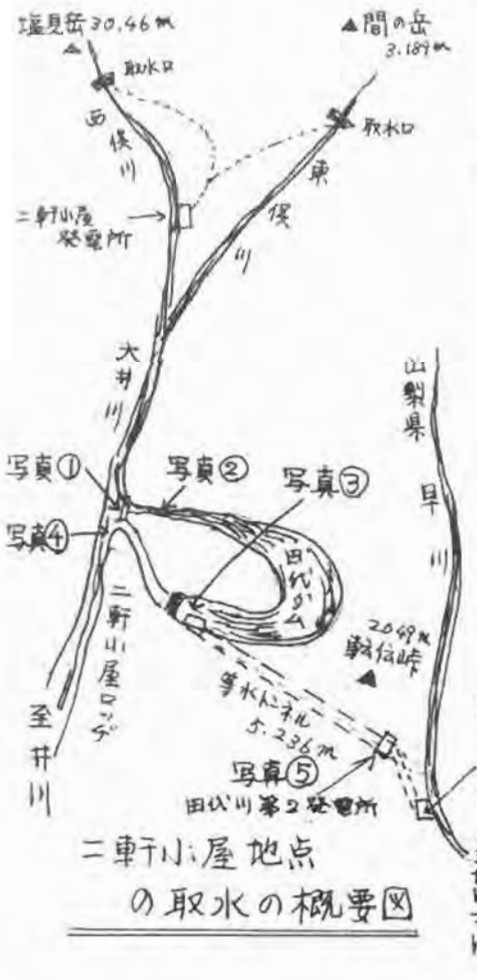
大井川は、越すに越されぬ大井川といわれていますが、徳川幕政下の関所川としての川、越え制度が、さう言われたものです。明治・大正期に入り、電源開発の川として変ぼうをはじめ、大井川鉄道の布設は、電源開発に拍車をかけることになりました。

電気事業がようやく独占の時代を迎えつつあった昭和十二年から、軍部官僚を中心として電力国営論が提唱されるようになります。民有民営論者との間に、はなはなしい論争が展開されました。十五年戦争の起点となった満州事変(昭6)につづく日華事変(昭12)から太平洋戦争(昭16)という第二次世界大戦となり、電力の国家管理(日本発送電株)のスタートと電力統合による全国を九ツに分けて、九配電会社による配電と発電・開発に分離した)による統制経済の時代となり、大井川には久野脇発電所(日発)が新設されたが、昭和二十年八月十五日の敗戦によるアメリカ進駐軍の占領下、戦後の復興は始まりました。昭和二十五年の朝鮮動乱(南北戦争)によって日本国は戦禍を免れた工業施設が、アメリカ軍の需要によってよみがえり、高度成長へのきっかけを作り、今日の日本国を形づくってきたのであります。(バブル経済を経て、いまだに不良債権の総額はかくされたまま、金融機関や大手セネコンを含む主要企業が、何時倒れてもおかしくない時代となり、先行不明の時代といわざるを得ません)——閑話休題——

さて、話をもととして、昭和二十二年、国は食糧増産のために、国営大井川用水の開発計画をします。続いて昭和二十五年から国土開発法の線に沿って、果は第一次静岡果総合計画を発表し、第二次・第三次(昭27)第四次(昭29)第五次(昭32)と進められ、大井川の電源開発(六発電所)、貯水池(井川・笹間川ダムのニヶ所)の建設計画が進むのであります。特に電源開発のうち久野脇発電所の放出水を、神尾池点(金谷町)に導水しての神尾発電所建設の計画が、総合開発計画の変更で、川口発電所(島田市)の建設と、放出水を農業用水と広域水道用水および工業用水にと、利水計画を変え、ことになりました。

この計画の変更で久野脇発電所の放出水は、大井川本川に戻されることなく、河底をサイホンを通して対岸に導水し、大井川ダム(本川根町市代)下流の余水は、支流寸又川の放出水も合わせ塩郷堰堤(ダム)で集めて、笹間川ダムに導水して、笹間川の水を合せて川口発電所に送水されます。(63号に掲載の発電所と導水管図参照)

これ以来、大井川の水と環境問題は、次々と新しい時代の様相を反映しながら変化してまいります。



二軒小屋地点の取水の概要図

点描(その二)——大井川の水が富士川へ—— 源流二軒小屋での取水と発電を探ぐる

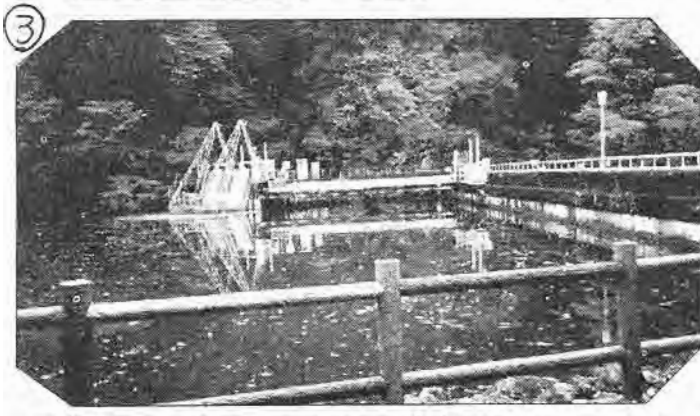
大井川の水は静岡県の最北端の間の岳(三二八九m)を源流として、東俣を流下し、西俣の水を合せて二軒小屋に至り、その少し上流で東京電力(株)田代川発電所用に取水されて貯水(田代ダム)し、転付峠(ニ〇四九m)の山腹をトンネル(五、三三六m)で貫き、山梨県富士川側へ導水し、落差二〇〇メートルを求めて発電を行っています。

これは明治四十一年(一九〇八)日英水電(株)のイギリス人技師アルバート・フレーンの二人によって、实地踏査されて出来た「榎島保村計画」をその変形として、取水口を榎島の上流ハキロ地点の二軒小屋上流へ移したものであります。ことにこの発電所は富士川側にあり、大井川水系の発電所とはいえませんが、大井川の水を利用してゐることに違いはありません。

田代川第二発電所の水利については、大正十年(一九二一)二月七日、田代川電力(株)が水利使用許可を受け、たのが、その水利権のはじまりである。としていますが、若干異つてゐると指摘されています。

田代川電力は、大正十五年(一九二六)三月九日に、水利使用計画を変更し、その水利使用許可を受けてのち、同年四月二十四日、松永安左衛門を社長とする東京電力(株)に、この水利権を譲渡します。

この田代川電力(株)は日英共同(株)に水利権を譲渡した田代川水力



電気事業(株)とは別の会社であつて、田代川水力電気事業(株)のもつていた水利権は、日英共同(株)に譲渡されたが、それはその後消滅し、田代川電力(株)があらためて許可申請をしたものであります。

田代川発電所の設備は、第二発電所が昭和二年(一九二七)十一月に完成し、下流の早川(山梨県・富士川支流)との合流点の右岸、すなわち早川発電所の対岸に当る地点に設けられた田代川第一発電所は同年九月に完成します。いずれも東京電力の手によるものであります。

昭和三年(一九二八)五月、東京電力(株)が東京電灯(株)に、吸収合併されると同時に、田代川発電所は、第一、第二発電所とも東京電灯(株)の所有となりまゝたが、昭和十三年(一九三八)四月、電力国家管理のため、「電力管理法」と「日本発送電(株)法」が公布され、昭和十四年(一九三九)四月に、

写真① 田代ダムの取水口全景(右側の大井川が写真④と異なる)
② 取水口から田代ダムへ至る導水路
③ 田代ダム全景。ここから転付峠をトンネルで送水して、田代川第二発電所へ至る。(落差約500m) 三角柱2機の所が送水取水口。

出力二〇〇KWを超える全国主要の火力発電設備と出力五千KWを超える水力発電設備ならびに送・変電設備の増利出資を三十三の関係事業者から受けて、資本金七億円の電力トラスト日本発送電(株)が発足し、さらに昭和十六年(一九四二)四月、発電管理を強化するため、電力管理施行令を改正して、全国的主要発電設備を、日本発送電(株)に帰属させることになり、昭和十六年十月と、昭和十七年四月に分けて実施されました。そのため、田代川第一、第二発電所は、昭和十六年十月一日に電力統制の中で、東京電灯(株)から日本発送電(株)へ移籍しました。その後、多少の水利使用変更の許可申請などが行われ、許可を得たが、最大出力に変更を見ることはなかった。

日本発送電(株)に所属した田代川第一、第二発電所は、敗戦後の昭和二十六年(一九五二)五月一日の電力再編成によって、東京電灯(株)(戦時中から関東配電(株)を主体として出来た新しい東京電力(株)にふたたび帰属し、古巣へ戻ったことになり、現在に至っております。

東京電力(株)の説明資料によりますと、大井川の源流の水が田代ダムに貯められ、発電を起こす為の取水料と発電所の概要は下の表になっていきます。

★田代ダム取水の水利権の更新期は
平成十七年十二月三十一日です。

★大井川流域住民の素朴な疑問

- 大井川の水を何故富士川(早川)へとられたのか。
- 毎秒3トンだと思っていた取水が何時の間にか4.99トンになっていた。

●大井川の水は大井川にとり戻せるのか。(流域の水は同じ流域へ戻してほしい)——この項終り。

※次回は大井川最大の支流「秩岐・寸又川」を探る予定です。

田代川発電所への取水量は

	当 初	昭和39年4月
最大取水量	2.92 ^{毎秒} 立方メートル	4.99 ^{毎秒} 立方メートル
最大使用水量	5.34 "	5.34 "
許 可 者	静岡県知事	山梨県知事

高度経済成長期における電力需要への対応

現在の田代川発電所の概要は

	最大使用水量	有効落差	最大出力
田代川第2発電所	5.34 ^{毎秒} 立方メートル	492.24メートル	21,700 KW
田代川第1発電所	6.03 "	350.00 "	17,400 "

- ★田代川発電所で発電した電力のゆくえは.....
- 地元早川町をはじめ山梨県南部の家庭へ —— 30%
 - 静岡県富士市の駿河変電所へ送電して、静岡県下の富士川以东の地域の家庭と工場へ —— 70%
- [註] 電気には50サイクルと60サイクルがあり、富士川を境に東は50サイクル、西は60サイクルのため、電力の供給地域が分かれています。

★田代ダム取水の水利権の更新期は

平成17年12月31日です

④



写真④ 三軒小屋地点の田代ダム取水口です。下にある流の流(人工的に造られた大井川本流)

⑤



写真⑤ 田代川第二発電所遠望

大井川発電隧道潜入記

中道 正 巳

徳山から藤川に架かる石世橋を渡り、真直ぐに山に向かつて国道の丁字路まで行く。そこを西に水川へ向かつて一〇〇メートルほど行き、再び山に向かつて行くとき麓に小さなトンネルがある。一年生の頃、近所の年上の少年達に連れられて見に行つたことがあった。

付近はおびただしい鉛色をした小さく砕いた岩石が、民家の近くまで敷き積まれ、台地になつてトロッコレールが敷かれていた。飯場は茶畑の中であり、賄いの女の人もいた。また工事の最中で、山から掘り出した岩石が、ワイヤーで繋がつたトロッコでトンネルから運び出され、小さく砕く機械へと送られていた。その様子を見ながら歩いて行くと、もう一つのトンネルの入り口があった。今の工事ではなく、だいぶ前に作られたようだった。

「あのトンネルに入ろう、年上の者が言い出したので付いて行つた。幸い作業をしてゐる人には気付かれなかつた。作業員は赤銅色をした朝鮮の人だった。また太平洋戦争の最中で、朝鮮人の土方が来てゐるから気を付けるように、という大人たちの噂を聞いたことがあった。土木労務者を知らない子供には土方とは怖い人というイメージだった。

現在は分らないが、朝鮮の人は日本語の濁音の発音が出来ない人が多くいた。特に八行の濁音は半濁音の発音になつてしま

うのである。この発音を真似てつくられた言葉があり、



朝鮮の人が通り去ると囃してゐた子供がいた。「チエニカ、チエニカトオモタラ、ピルピンノフタカ」道路に落ちていた硬貨を拾おうとしたら王冠だつたという。

これは子供でも意味がわかることで、知らないで囃してゐるのではない。朝鮮の人は皆な貪しく、そうしてゐると思つてゐるのである。これは大人がつくつたもので、朝鮮の人の人格を軽蔑した当時の風潮であつた。

軽蔑視されてゐることを知る朝鮮の人は、道路を歩く姿が日本人に對し遠慮がちに見えた。後にこれも反日感情の一つとなるのである。

推測ではあるがこの工事の作業者は、日本軍に強制され連れてこられた人たちかも知れない。山田節さんの大井川流域の発電所は、発電所から発電所に繋がる導水隧道が八〇キロになるとあります。その工事の多くは、この人達の労役によるものではないでしょうか。

入ろうとしたトンネルは、ようやく大人の立つて歩ける位の高さで、下に向かつて緩やかな傾斜で掘下げられていた。階段がついてゐたように思う。入り口付近の天井には名も知らない虫や蜘蛛などがいた。しばらく降りて行くと、明かりが無いので先は真つ暗だった。下の奥のほうでゴーンという水の流れる音がしてゐた。

三年生の時に崎平の発電所へ遠足で見学に行つたとき、送水管から発電を終えた水が、勢い良く噴出してゐるプールがあった。しかし、その水が川に流されず山のトンネルに入つて行くので、いったい何処へ流れて行くのだろうか。不思議に思つたが、その水音が崎平の発電所から流れてくる水の音とは、その時は思ひもしなかつた。

余談ですが、日発から中電に社名が変わつた頃、何かの行事で東海林太郎の公演が発電所の敷地内であつた。そのポスターが徳山の当時魚屋だつた角登屋さんに貼られていた。近所のNさん、息子さんが発電所に勤めて



アケビ

いたので、ポスターが貼られる前から知っていて、そこで近所にも来る事を話したらいいところか、ポスターの文字を見て、私の家に来て父にこう言った。「東海林太郎が来るって言う話だっけーがな、広告にやトウカイ、リントロウって書いてあるよせい。来るわけじゃないー思ったけーが、やっぱりデマだ、きや」大人がトウカイ、リントロウと読んだ。哑然とした。ふり仮名があったのに……

トネルの先が見えないので、年上の者が杉の小枝で松明を作り、その明かりで降りていったその時、下から丸い光が二つ上がってきた。ヘッドランプをつけた作業員だった。一人は日本人だが、もう一人は赤銅色の朝鮮の人だった。二人は私達を見て「こら」と叫んだ。後の言葉は耳に入らなかった。

私達は松明を放り投げ、一目散にトネルを出てからもしばらくは村の方へ走り続けた。叱られて当然だった。下まで行って、もし松明が燃え尽きたら、大変な事になった事だらう。子供はそこまで考えていない……

間もなく終戦になると、朝鮮の人達は、その後、見かけなくなつた。六十年前のことである。

「おしんのモデルのふる里は

大井川上流部にあった

五月も終りの頃、本川根町寸又峡温泉の源泉が湧く前、黒法師岳へ清掃登山に行った時のこと、同行された教育委員会の築地さんと話した際、「築地さんのふる里は山形？ おしんの幼少の舞台の近くですか？」「うーん、そうにはさう

だけけど、おしんのモデルになった方は、本川根町八木地区出身の方らしいですよ。」「え、さうですか……知らなかった。」「古い雑誌だけれど、残っていたら見せましよう。」「お願いします。」「後日、二十年近く前の昭和五十九年一月一日発行『主婦と生活』新年特大号』が送られて来ました。」「読んでびっくり！ おしんのモデルのふる里は、遠い所ではありませんでした。昭和五十八年、NHK連続テレビ小説『おしん』の作者橋田寿賀子さんのもとへ、小笠原津岡町の丸山静江さん（ご存命なら九十七歳位）から「体験を綴った手紙」が送られ、丸山さんの手紙をヒントに橋田さんが創作され、あの感動の『おしん』が生れたとのことです。もちろん、当時の世相や史実も加え、ドラマチックな作品となったのでしようが、その根柢には、明治

大正、昭和（平成も？）の激動期と貧困の時代を、強く逞しく生き、きた女性の一生が描かれていると感じます。丸山さんだけではない、何百人のおしんがいたのでしようね。では今回と次回、二回に渡って、お届けします。



セオで子守奉公に……

私の生まれまゝに静岡県榛原郡本

川根町八木というところは、川根茶で有名な山の中、すり鉢状の小さな盆地です。大井川の上流で、何年か前、金婚老が立てこもって有名になった寸又峡温泉のあたりといえは、おわかりでしょうか。私は明治四十年生まれ、父は百姓、私は八人きょうだいの末っ子で、母は私が教えてセオの年に死にました。

翌年、私はつり橋を渡った上流の村へ子守に出されました。二人の小さい男の子を子守するのです。今では、あの辺は



めつたに雪は降りませんが、大正の初めの頃あの当時は、胸までつかる深い雪が降りて、長いつららが下がったものです。一月のある寒い日、沢へ行っておしめを洗ってきたら、奥さまに「ウニコが汚れている。もう一度、洗い直してこい」と命じられました。いわれたとおり、沢で凍るような水に手をさらして、何べんも洗っているうちに、つらくて、情けなくて、逃げようと決めました。

そばの水車におしめを引っかけ、雪で道もわからなくなつた山道を裸足でスタスタと歩きだしました。途中の親戚の家に寄りますと、「茂助兄」といつていた人が、驚きながらやさしく迎えてくれ、「春になつてつり橋の雪がとけたら家に帰ればよい」というので、その家にはしばらくいました。

ようやく雪がとけて、家に帰りきいたら、父は「なぜ逃げてきた」と叱られ、蔵の中に半日入れられました。蔵の中でじーっとしゃがんでおりました。ああ、ここはいい、いつまでもこうして何もしないでもいい」と思いました。

そのうち、また守に行けといわれ、今度は奥泉という所の、学校の先生をしている家にもらわれていきまされた。そこで二人の男の子をお守りしましたが、赤ん坊を背負つて、小学校へ通うことができました。でも背中の子が泣くたびに廊下に出され、泣きやんだらまた授業を受けるというふうでしたので、学校の授業は受けないと同じでした。

激流の大井川を下る

そんなふうにして、子守奉公を務め終えますと、今度は金谷の宿へ、やはり子守に売られることになりました。米六俵分のかわりに一年間、年季奉公するのです。

おんが後で川を下るシーン



九才でした。

金谷から米を上流の村へ運んできた船が、材木を買い込んで下るとき、丸太を筏に組むのですが、その筏に乗つて大井川を下るのです。あの「越すに越されぬ大井川」と歌われた、水かさもあり、急流もある大井川の川旅は、おそろしいものでした。バシヤンと水しぶきがかかり、波にさらわれそうになるたびに「寝てろ」と船頭にどなられ、丸太にしがみつき、途中で一泊、二日かひりの川下りでした。

奉公先は金谷の髪結いさんでした。ここでの一年は逃げて帰りたいほどつらかったです。でも、米と引き替へに売られた身では、辛抱して務めるより、しやうがありませんでした。ようやく年季が明けましたが、すぐにまた、今度は島田の小料理屋に二年間、米十二俵と引き替へに売られました。ここでは、まわりの人がかわいがつてくれ、お正月にご主人が、「おまえはよく働くから、これをあげよう」と半玉のお古の袂の長い着物と桐のポックリをもらったときは、ほんとうにうれしくて、その絹のすべすべした着物を抱きしめました。物心ついたときから、親に何一つ温かいものを食べさせてもらったことはなく、新しい着物をあてがわれたこともありません。いつも、残り物の冷たいご飯と、着古した粗末な着物ばかり。しかし、一生懸命働けば、他人がよくしてくる。働いてお金が入れば、自分で何でも買える。幼いなりに、このことは、私の心にしつかりと植えつけられました。

上京して髪結い修業

島田での年季奉公が明けたあと、父に引き戻されて、家の手伝いをしたり、浜松の製糸工場へ働きに行ったりしておりまゝだが、浜松で理髪学校を開いている叔母の紹介で、大正十二年に上京し、お茶の水にある理髪学校に入りま

した。
そこで四年間見習い修業をすませると、アメリカでコテを使う洋髪を覚えて帰った川上千代先生について、三年間職人として働きまゝした。

そのうち私は独立して小伝馬町に間借りして、出髪(髪結いの出張サービス)に歩きまゝした。

ふるまきに髪結い道具一式を包んで、浜町から築地に

おしんがカミの女給連のもとへ出髪するシーン、川上美粧院の写真



丸山さんは上京して、髪結いの技術を身につけ、出髪で生計を立てる。



髪結い当時の丸山さん

かけて、色町一帯がお得意先です。

一日三十人から三十五人もの髪を結いさした。もちろん日本髪です。元締めがゆるまなはいようカがはいりますし、やけどするほど熱い湯でなまや髪はしほれない。修業時代から手にアカギレが切れても、斜削膏はみつともない。と、はることは許されず、そのため、痛みには泣くほどの思いをいたさした。そのかわり、収入はよくて、働く張り合いはありまゝした。

一月出髪して歩いて帰ると、間借りしている家の近くの喫茶店で、今でいうアルバイトでしようか。皿洗いも夜の十一時ごろまでやりまゝした。

それが終わって家に帰ると、階下のおばさんが、「静ちゃん、本が来ているよ」と声がかかりました。私は部屋で和とじの本とじの本とじの内職もしていました。百冊とじれば五十銭もらえまゝした。その夜のうちに片づけようと、二時、三時までがんばりました。私の収入を頼って、実家の父や兄から、十円、五十円送ってくれ、父は「してくれ」と無心の手紙が来るので、暮らしては楽にはなりません。前話—終り—

次回は、洋服商の夫と結婚・ヤクザに仁義を切る。飯場から飯場へ。をお届けします。お楽しみ。

なお、ドラマの「おしん」には、佐賀の生活、農作業、姑の仕打ち、死産のシーンなど、農家へ嫁いだ嫁の悲惨な様子が次々と映し出され、暗い切ない気持ちになります。その件には、もう一人の「おしん」のモデルが存在していたようです。次回では、また、大井川上流部が舞台となります。

定期購読のお願い

中川根ふる里通信は有料発行です。

I部 〒共 200円

皆様の定期購読が、ふる里通信の発行を支えます。年4回の発行を予定しております。

1年ごと4回分800円をご送金いただいても結構ですが、10回分位まで(2,000円)はお預り出来ます。

購読料が切れた方には振替用紙を同封致しますから、ご利用下さい。

もし、購読を止めたい時や、住所変更のおりも、是非ご連絡下さい。

郵便振替通知票番号

00870-4-81556

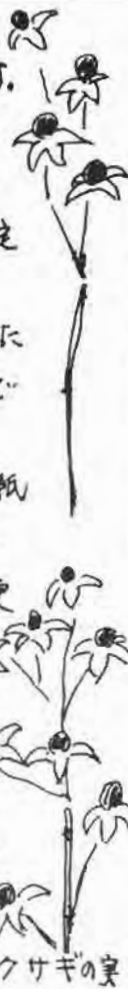
発行責任者 〒428-0313

静岡県榛原郡中川根町上長尾859-6

川 沢 節 子

TEL 0547-56-0015

FAX 0547-56-0020



クサギの実



9月1日から中川根町内に町営バスが増設され運行しています。新しいバス(上写真)の名前は「やませみ」号。車体には、新芽の茶畑、紅葉の深山、星空、動物と、中川根ならではの「ご自慢もの」。
平成9年8月1日運行「せせらぎ」号は、現状の、北部藤川・徳山から久野脇まで、に田野口が加わり、「やませみ」号は、地名、久保尾、老町河内と今までバスが通らなかった地域を通行します。これで、町内ほとんどの地域に町営バスが走ることにになりました。利用者にも大変喜ばれています。



もう何年前になつたのでしようか、第58回国民体育大会が静岡県で開催されることになつた時、中川根町に「山岳競技」会場が試案されたところか……
「とても受けることは出来ません」と言つて断つてしまつたそうなんです。その一方で、交流人口の増加を望んでいるという……もう少し先見の明があったら、山岳競技の会場も受け入れ、それを地域再生の道の一つとしたら、などと考えるのは、やはり、浅はかな者の考えてしまう
66号、67号同時発送という、不規則な発行になりました事を、お詫び申し上げます。又、66号お茶あられ、第三回と東京のかたすみからの記載が不明であり、お詫び申し上げます。



9月6日、帰って来た暑さの中、夏の国民体育大会の聖火リレーが、中川根中学生徒によって、受け継がれました。(写真、高郷・国道362号線を走る聖火ランナー)
夏の国体のカーニバル競技が本川根町で開催され、地元の選手も好成績を納め、よかったです。
今月25日、26日を中心にして秋の国体が行われますね、中川根町でも協賛競技「グラントゴルフ」が、高郷前の大井川河川敷グラントゴルフ場で、26日に開催されます。はつらつとした競技がされるといいですね。